入選

永遠を願って

川越市立初雁中学校　三年　三浦　愛子

「万物の根源は水である。」これは古代ギリシャ、自然哲学者のタレスという人物が説いたものだ。調べてみると、その他多くの哲学者や偉人達が同じようなことを述べていた。

そんな生命の母である水は、この世界に私たち生物が存在する限り、必要不可欠である。

そして、生きていく上で便利なものであり、怖いものでもある。まさに諸刃の剣なのだ。

その中でも地下水についての例がある。地下水は、身近な水源で利用しやすいのが特徴である。四季があり水温変化が気になる日本では、その心配がなく、古くから活用されている。水の使用量で見ると全体の約十二パーセントは占めるから、かなり重要な水資源と言える。

しかし、便利なものがあると人は欲をあらわにする。地下水を過剰に汲み上げたのだ。

過剰に汲み上げたからといって水だから大丈夫だろうと疑問に思う人もいるかもしれない。私もすぐに戻るだろうと思っていた。が、そういう問題ではなかった。地盤沈下が起こるのだ。つまり、地下水を汲み上げると地下水位が下がる。そして粘土層の中の水がしぼり出されて体積が小さくなる。沈下する。井戸、建物の基礎が抜け上がる…という負の連鎖が起こるのだ。特に戦後の産業発展後によく発生したらしい。水がそこまで影響するとは知らず、存在の大きさに驚いた。

今はダムの建設、地下水のかん養、河川水への水源転換…と有効活用されているらしい。

そこで厳しい現実を知った私は、水と森林の関係を思い出した。森が、水を溜めるダムの役割を担うのだ。要するに、森を作りだすことによって保水力のある土壌ができる。そして大雨か何かが原因で洪水が起こる。するとここで、渇水を緩和してくれる。

さらに深く掘り下げてみると、森林とのつながりはそれだけではなかった。なんと水源かん養機能があり、日本のように険しい山があって、季節で大きく変動するという国には、とてもなくてはならない存在だったのだ。

私達が生きていくために必要な水、水源地の幾世代にもわたる人々が守ってきた森林。

そこから生まれる大地への恵、ダム等の供給施設。それらを共通の財産として守り、後継していく必要があるのではないだろうか。

そして今日、この瞬間に気づいたことがある。それは、水が人々の喉を潤し、大地に恵を与え、作物をはじめ、あらゆる生命を育んでくれるということだ。津波や洪水など災いにもなる反面、私たち地球の生き物に当たり前の日常を与えてくれる。そもそも、水が存在しないことには何も始まらないというのを誰もが理解できるであろう。

水とは万物の根源であり、命のバトンである。それが無限ではないことを忘れていないだろうか。この水が枯れ、バトンとしての役割が果たせなくなったとき…。その前に私達は自分のためにも、未来のためにも、長期にわたって共存していく方策を考えなければならない。際限なく流れる、水を願って。